



中村陽子ステップスギャラリー初個展である。中村の活動歴とこれまでの作品に共通する事項については会期中に会場内で配布されたリーフレットで触れたので繰り返さない。ここでは展覧会評に集中することにしよう。今回の展覧会は、中村の本領が発揮された。中村が自らを徹底的に追い込み、これまででないほどまでの集中力と全身全力を駆使した作品制作が実を結んだことになるのだが、その良さを引き出したのが吉岡による展示である。吉岡はまず画廊入り口に横長の中品を備え、画廊に入ると左奥に同色の大型作品が並べたことが確認できる。日本の美術館では日本画の主題を追う風潮が残っているの、逆時計回りに導線が引かれることが多々ある。それに則って画廊に入って右に回ると、入り口と同色の大型の作品が一点展示され、外から見えた二点と向き合っていることになる。そして入り口からみて右側、メインの壁面を飾るのはスクエアの大型作品四点の二段掛けだ。この四点を見ることで、中村の全ての作品が全く異なる心持で制作されていることが明らかとなる。

背中側に目を向けると、今度は横長の作品が地平線を支配するように展示されている。画廊の中央に立って視線をさ迷わせると中村の筆致は画面を飛び越えて、天井にも床にも響き渡り、自己の全身が包み込まれるように錯覚する。絵画を成立させるのは、描く側の意図だけではなく、描く者を含む見る者の意思なのだ。これまで何もなかった場所、間の中から生命を見出し、命を吹き込む作業ほど尊いものはない。

